

2020年7月19日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 18 : 47～51

ルカによる福音書 9 : 18～20

「メシア」

<いったい、何者だろう>

イエスさま、という方は何者か。

その答えは、「神のメシア」。「神に遣わされ、神の救いを実現なさる救い主」です。

イエスさまが救い主。これこそ、キリストの教会の信仰の中心であり、すべてです。このことを信じ、告白するのが、わたしたち教会の群れです。

これまで聞いてきたルカによる福音書では、イエスさまは、神の国について、つまり神が救いの恵みによって人々をご支配して下さる、ということについて、人々に教えて来られました。そして、そのことを実現するのが、神の御子であるご自分であることを示し、神の力と権威によって、多くの人々の病をいやし、また悪霊を追い出してこられました。そうして、ご自分が何者であることを示して来られたのです。

イエスさまは、十二人の弟子たちにもその神の力と権能を授け、「使徒」として各地に遣わし、神の国を宣べ伝えさせました。そして、前回の聖書箇所では、五千人もの人々を、わずか五つのパンと二匹の魚によって満腹させる、という奇跡を行われました。旧約聖書で語られていた、すべての命を守り、導き、養う、まことの羊飼いが、ご自分であることを示されたのです。

人々は、この力ある教え、力ある御業を行なう「イエス」という人が、只者ではない、ということには気づいていました。人々は、死んだ洗礼者ヨハネが生き返ったのではないか。終わりの日、主が来られる前に再来するというエリヤではないか。あるいは、旧約聖書の時代の預言者が生き返ったのではないか。そんな風に口々に推測しました。確かに、神から遣わされた特別な人だろう、ということは認識していたのです。

しかし、はっきり「どなたである」ということは分かりませんでした。それは、イエスさまに招かれてからずっと、イエスさまの近くに從って、生活も、伝道旅行も共にしてきた十二人の弟子たちもまた同じでした。「いったい何者だろう。」「この方はどなたなのだろう。」人々が、弟子たちが、イエスさまに対して抱いてきた問いかけです。しかし、イエスさまの近くで教えを聞き、御業を体験してきた弟子たちには、確かにこの方がどなたかが示されてきました。

そして今日、とうとうイエスさまの方から、弟子たちに問われたのです。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」

世間がどうか、人がどう言っていたか、ではありません。あなたがたは。あなたは、わたしを何者だと答えますか、ということです。

ここでイエスさまは、他人事ではなく、わたし自身の事としての、わたしの答え。わたしの口の言葉で、イエスさまがどなたであるか答えることを求めておられるのです。そしてまた、わたしたちもこのことを問われるのです。

<イエスさまの祈り>

さて、イエスさまは、このことをどのように問われたのでしょうか。

今日の18節のところには、イエスさまが質問なさる前に、「イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。」とあります。イエスさまと弟子たちは、体は、同じ空間に共にいました。しかし、祈りをささげておられるのは、イエスさまお一人でした。

イエスさまは弟子たちに大切なことを問うにあたって、まず祈っておられたのです。弟子たちが正しく導かれるように。神さまの示されることを受け止められるように。その口で、正しく応答することが出来るように。そのための執り成しの祈りです。これから、最も重要なことを問われる彼らを思い、またこれから歩まれる道における弟子たちを思い、イエスさまは祈られ、それから質問されました。

<告白への導き>

イエスさまはまず「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか。」と聞かれました。

弟子たちは答えました。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」

そして、イエスさまは問われたのです。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」

これまでは、群衆や弟子たちが、イエスさまについて、この方は誰か。どなたか。何者か。そう問うてきました。イエスさまが何者かを知りたいと思ってきました。しかし今、その立場は逆転します。イエスさまの方から問われるのです。主導権をイエスさまが握り、ここで問いに答えることを求められるのです。

それは、わたしたちも同じです。最初は、イエスさまのことは、キリスト教という宗教の人、歴史上の人とか、名言を語った人とか、素晴らしい教えを語る人、奇跡を行なった人、など、知識や関心の対象でしかなかったかも知れません。

しかし、イエスさまは生きておられるお方です。この方は、わたしたち一人一人と関わり、交わることを求めておられます。ですから、出会って下さり、御言葉を語りかけて下さり、恵みの御業を見せて下さり、十字架と復活による救いを宣言して下さる。そして、わたしたちにそれを受け入れること、応答することを求められるのです。

この方は、ただの歴史上の昔の人物なのでしょうか。それとも、今も生きておられる神の

救い主なのでしょうか。イエスさまは「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問われます。イエスさまとわたしがどういう関係か。わたしにとってこのイエスさまとはどなたなのか。それを認め、告白することを求められるのです。

このことを問われたなら、もはやイエスさまと距離を取り、外から客観的に眺めているだけではられません。イエスさまが近付いて来られ、関わってこられ、あなたにとって、わたしは何か。あなたは、わたしを何者だと言うのか。そう問いかけて来られるのです。

<神のキリスト>

ペトロは弟子たちを代表して答えました。「神からのメシアです。」

「メシア」とは救い主を意味する言葉で、元は「油注がれた者」という意味です。ここは原文のギリシア語では、「τὸν χριστὸν τοῦ θεοῦ」となっていて、直訳すれば、ペトロは「神のキリスト」と言っているのです。日本語の聖書でわざわざギリシア語の「キリスト」をヘブライ語の「メシア」に直すというのは複雑な翻訳ですが、旧約聖書で待ち望まれていた方であることを特に強調したかったのかも知れません。

とにかく、神のキリスト。神が油を注がれた方。これがペトロの答えであり、告白でした。

それは、神の使命を全うする方。神の救いを実現する方、という意味です。わたしたちの願いや思いを実現する方ではありません。この方は、神の御心を成し遂げる方です。そうして、すべての人を救って下さる方。あなたは、神が遣わされた救い主、御自身でられます。ペトロはそう語ったのです。イエスさまは、神のご意志を実現する方であり、わたしの救い、命に関わる方だ、ということです。こうして、ここで人の口から、イエスさまがどなたであるかが、はっきりと言い表されたのです。

<不十分な中で>

しかしこのイエスさまがどなたか、という告白は、ペトロが考えて自ら結論にたどり着いたとか、信仰がある水準まで達したから告白できたとか、納得し理解して分かった、というものではありません。ペトロも、弟子たちも、イエスさまが救い主であることを告白しても、依然よく分かっていないところもあるし、思いも不確かだし、理解も不十分でした。

しかし、イエスさまが、この問いかけの中で告白へと導いて下さったのです。イエスさまはいつも弟子たちを側において下さり、何度も何度も御言葉を教え、何度も何度も恵みの御業を目撃させて下さいました。

そしてこの問いは、イエスさまの執り成しの祈りの中でなされました。導きの中で、愛の眼差しの中で問いかけて下さり、問われたものがこれに応え、イエスさまとの交わりに生きる者となるように、この方がどなたかを知り、その恵みに生きる者になるように。イエスさまが、ペトロを、そしてわたしたちを、告白へと導いて下さるのです。イエスさまが、ご自分が何者であるかを現して下さい、問いかけて下さるから、わたしたちはそれを口にして認め、告白することが出来るのです。

実際、この告白へと導かれ、イエスさまをメシア、キリスト、救い主であると認めた弟子たちも、それが具体的にはどういう意味か、何によって、どんな風に救いを実現する救い主かは、まだ何も分かっていませんでした。

旧約聖書において「メシア」とは、神さまが特別に選び、大切な務めを担わされる者に、油を注がれた者のことです。それは、王であり、また祭司であり、また預言者でした。ですから、救いのために神さまが選ばれ、立てられ、神の特別な使命を負い、それを果たすために遣わされる者を、「メシア」と呼んで、期待するようになったのです。

当時、ユダヤの人々は、「メシア」が現れ、自分たちの滅ぼされてしまったイスラエルの国を立て直し、民を救って下さることを待ち望んでいました。

しかし、実際はそうではありません。このペトロが答えた直後、来週の聖書箇所、イエスさまはご自分が「多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、そして三日目に復活する」ことを弟子たちに語られます。神から遣わされた救い主が、苦しみを受けて、神の言葉を教える立場である長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて、殺される。そして復活する。まことの神のメシアは、このようにして救いを実現するのです。

これはかなり衝撃的な予告です。神から遣わされた「救い主」が、そのような目に遭うなんて、考えられるでしょうか。今、あなたは神のキリストだと答えた、そのイエスさまが、人々から排斥され、殺されるなんて想像できるでしょうか。

とうてい受け入れられないことですし、そんなことがあってはならない、と思うでしょう。マルコ福音書では、イエスさまが受難を予告された時に、「ペトロがイエスさまをいさめた」と書かれていますし、マタイ福音書ではペトロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と言ったのです。

しかし神さまは、人の思うようにはなく、神さまのなさる仕方で、つまりイエスさまの十字架の死によって、そして復活によって、すべての人の救いを実現なさるのです。

イエスさまに「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問われたペトロは、「神のキリスト」「神に遣わされ、救いの御業を成し遂げる救い主です」と確かに正しく答えました。しかしその内容は、何も理解出来ていなかったことになります。

実際に、ペトロも他の弟子たちも、いざイエスさまが逮捕さえ、十字架に架けられるとなると、裏切り、見捨て、逃げ出してしまいます。

それでは、この告白は口だけで、虚しいものだったのでしょうか。ただ言わされただけで、意味はなかったのでしょうか。

そうではありません。これは、イエスさまとの交わりと、イエスさまの執り成しの祈りと、イエスさまの問いかけへの応答としてなされたものです。ペトロは個人の思い込みや、信念を語ったわけではありません。

このやり取りは、イエスさまに主導権がありました。この告白は、イエスさまの祈りと導きに支えられたものでした。イエスさまは、ご自分が何者であるかを問い、救い主であることを告白させる中で、ご自分の救いの恵みの中に、交わりの中に、ペトロを、弟子たちを、わたしたちを、しっかりと立たせて下さるのです。

わたしはあなたたちの罪を救うために、神から遣わされた救い主である。そう言って下さるイエスさまの御言葉を、御業を、わたしたちが自分のこととして受け入れ、信じ、告白するように、導いて下さるのです。

ですから、わたしたちの信仰の歩みは、わたしたちの気持ちの強さや、熱心さや、努力によって保たれ、全う出来るものではありません。わたしたちは、気持ちが弱くなることも、心が冷えてしまうことも、怠惰になってしまうこともあります。しかし、それでもなお、イエスさまの導きと、この方こそ救い主であるという真実の上に、この確かさの上に、わたしたちの信仰は立てられているのです。

わたしたちが弱っても、倒れても、打ちひしがれても、イエスさまが救い主であられるなら、この方によって立つことが出来るし、強められることが出来るし、また感謝をもって歩む者となることが出来るのです。

まさに、こんな罪深いわたしたちを救うために、神のメシア、神のキリスト、神の救い主であるこのお方が、わたしたちを捕らえていて下さるのです。

イエスさまは「神のキリスト」。この方は、わたしたちの救い主。神の救いを成し遂げられる方。それは、わたしたちが告白するからそうなるのではなく、このお方が、まことに真実な救い主であるからこそ、そのように告白出来ることなのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、わたしたちの救いのために、御子を救い主として、メシア、キリストとして世に遣わして下さいました。その語られる御言葉、なされる御業によって、究極的には、わたしたちの罪の贖いのための十字架の死と、復活の御業によって、まことにこの方が救い主であることをお示し下さいました。

イエスさまの執り成しの祈りの中で、恵みの中で、わたしたちもまた、イエスさまが神さまに遣わされた救い主であると。わたしたちを救って下さる方であると、真実の告白をなさせて下さい。

この真実な告白の上に、わたしたちの信仰の歩み、教会の歩みを導いて下さい。

そして、一人でも多くのが、イエスさまを救い主と信じて告白し、洗礼を受け、あなたの恵みの内に、イエスさまと共に、生きる者となる事が出来ますように。

このお祈りをイエスさまの御名によって祈ります。アーメン